

がんばれ！  
北海道

開拓の群像特集

合田 一道



歴史から見えるもの ②③

人間平等を貫いた開拓判官 松本 十郎



松本 十郎は  
開拓使の石狩  
(札幌)本府の三  
代目判官として、  
札幌の基盤作  
りに務めた人物  
です。でもその功績はあまり知られていません。

十郎は庄内藩(山形県鶴岡市)の藩士の子に生まれました。本名を戸田惣十郎といいます。幕府が蝦夷地を直轄地になると、庄内藩は天塩、留萌、苫前、浜益などに藩士を派遣し、十郎は文久三年(一八六三)、二十五歳の歳の時、父親とともに苦前に赴いています。

戊辰戦争が起こり、庄内藩は奥羽列藩同盟に加担し、官軍と戦って敗れますが、藩の減刑運動のため周旋方として江戸に入り、薩摩藩などと交渉に当たります。この時から松本十郎と名乗ったのです。

明治二年(一八六九)、開拓使が設置されると、薩摩の黒田清隆の推薦で開拓判官になります。六人の判官のうち幕府側だったのは十郎だけ。

ここで十郎は北海道開拓の施策要綱をまとめました。

根室出張所の開拓判官になった十郎は、漁業制度の改革に乗り出し、漁場を希望者に割り渡し、税額を下げ、働きやすくしました。そのうえ自費で病院を建て、一室を教育所にしました。普段はアイヌ民族が着るアツシを着て、誰とでも気軽に話すので、人々は「アツシ判官」と呼んで親しみました。

明治五年(一八七二)、開拓使札幌会議の席上、開拓次官の黒田と大判官の岩村通後が対立。岩村は罷免され、後任の大判官に十郎が任命されます。

十郎は札幌に移ると、開拓使の綱紀肅正や官吏の大幅削減などを断行し、僅か二年で巨額な負債を償却します。独断で救済工事を始め、越権行為として処罰されたこともありましたが、意欲的に事業に取り組み、札幌近くに故郷の旧庄内藩士を入植させて桑園を開きました。桑園の地名はこれによるものです。

人々の意見を聞き、かたわら篠路(札幌市)の早山清太郎や島松(北広島市)の中山久蔵らの開拓者たちと親交を深めました。誠実な人柄で

「人間は平等、上もなければ下もない」が信条でした。

明治八年(一八七五)、樺太・千島交換条約が締結され、樺太に住むアイヌ民族で、日本に帰属を希望する者は島を去らねばならなくなりました。黒田は樺太アイヌ民族八百四十二人を宗谷に移し、さらに内陸の対雁(江別市)に移そうとします。

十郎はアイヌ民族代表と会って、日本に帰属したのを悔やんでいる、樺太に戻りたい。という訴えに驚き、対雁行きを辞めるよう、黒田に伝えました。だが黒田はこれを無視します。

十郎はただ独り、札幌を出発すると石狩川を逆上り、途中、幌内炭鉱を観察し、徳富川の畔でアイヌの古老と会談し、層雲峡を歩きました。この時、樺太アイヌの人たちが巡查二十人に鉄砲を突きつけられて船で連行され、憤慨した古老が血を吐いて死んだのを知らされ、愕然となります。

辞任を決意した十郎は、黒田に対して長文の便りを書き、北海道を去ります。こうして故郷の鶴岡に戻った十郎は以後、農民として暮らし、再び表舞台に出ることはありませんでした。



十郎が中山久蔵に送った書  
=旧島松駅通所蔵

◆プロフィール◆

昭和九年(一九三四)、空知郡上砂川町生まれ。北海道新聞に入社し、道内各地を回る。在職中からノンフィクション作品を発表。「定山坊行方不明の謎」で北海道ノンフィクション大賞を受賞。退職後は札幌大学文化学部講師。著書は『日本史の現場検証』(人間登場)『北の歴史を彩る』『大君の刀』など。